

# スペイン領フィリピンにおけるカトリック信仰

菅谷成子

## はじめに

フィリピンは、現在、総人口の約83パーセントがローマ・カトリシズムの信徒であるといわれ、アジアにおける有数のキリスト教国となっている（寺田2002年、58頁）。これは、約350年にわたったスペインによる植民地支配の遺産でもある。一方、そのカトリシズムの実践については、スペイン到来以前の精霊信仰の伝統との混淆あるいは融合がみられ、フィリピン諸島の住民が主体的・選択的に外来のカトリシズムを受け入れてきたこと、そして、現在それらの総体がカトリック信仰として人びとに理解され実践されていることを示している（Lynch 1975；Marasigan 1985；足立1991年；川田2003年；寺田1991年、81-88頁）。

もう一つ、スペイン支配の遺産として、フィリピンの歴史を語る上で無視しえないものに中国人移民の流入がある。フィリピン諸島は、地理的な条件から、中国の廈門を中心とする福建省との関係が深い。これらの中国人移民の存在がフィリピンにおける国民意識の形成、および、それと密接な関わりをもつカトリシズムの発展に一定の役割を果たしたことも見逃せない。

本稿では、スペイン領フィリピンにおけるカトリック信仰について、中国人移民およびその混血の子孫（中国系メスティーソ）との関わりに着目し、これをフィリピン国民国家形成とカトリシズムとの関係という文脈に位置づけて検討し、さらに、現代にも繋がるカトリック信仰のダイナミズムを知る手がかりを示したい。

## 1. スペインの植民地統治とカトリシズム

スペインの植民地統治は、「新発見の土地（インディアス／新大陸）」において、カトリシズムの普及と教会制度の確立を条件に、ローマ教皇より支配の正統性を認められたことを基底に据えるものであった。それゆえ、スペイン国王は、世俗の世界におけるローマ教皇の權威の代理として、福音を伝える義務を負い、植民地の住民に対して、齊しくカトリシズムを受容することを求めたのである。言い換えれば、「インディアス」の住民がカトリシズムに帰依することは、住民の意志はどうあれ、彼らがスペイン国王の權威を自発的に認め、その支配に服することに同意したとみなされたのである。

1565年より、太平洋を隔てたメキシコのアカプルコとガレオン船で結ばれたことで、スペインの植民地支配の端緒が開かれたフィリピン諸島においても例外ではなかった。初代総督となったミゲル・ロペス・デ・レガスピに同行したアウグスティノ会の修道士は、同年、最初のスペイン根拠地がセブ島に築かれると、直ちに諸島住民に洗礼を施し、カトリシズムを普及させるべく活動を開始した。

その後、1571年にスペイン植民地都市としてマニラ市が設置されたことは、スペインによる恒久的なフィリピン支配の開始を象徴するものであった。フィリピン総督の下で、カトリシズムの普及と教会制度の整備が図られ、1578年には、メキシコ大司教区の下に、マニラ司教区の設立が決定され、1581年に、初代マニラ司教として、ドミニコ会のドミンゴ・サラサールが着任した。その後、スペインの支配領域の拡大を反映し

て1595年にはマニラ司教区はメキシコから独立して大司教区に昇格し、その下に、マニラ司教区および新たにヌエバ・セゴビア、ヌエバ・カセレス、セブの3司教区が設置され、教会制度が整えられていった。

この間、フィリピン諸島においてカトリシズムの布教と住民の司牧を担ったのは、主として、各派修道会であった。17世紀初頭までには、先にあげたアウグスティノ会のほか、フランシスコ会、イエズス会、ドミニコ会およびレコレクト会が到来し、初期の布教・司牧を担った修道会が揃った。これらの修道会は、在俗司祭の不足により、教会制度が確立した後も土着言語別に割り当てられた担当地域に定着し、世俗権力による行政を補完する機能を果たし続けた。すなわち、修道会は、教会儀礼を通して植民地の人びとを把握し、その担当地域の住民にスペインの存在を知らしめると同時に、それぞれの修道会の独自性を発揮して、その地域性を維持し強化する役割をも果たしたのである（池端1990年、281-284頁）。

## 2. 中国人移民とカトリシズム

スペイン領フィリピンの存続を物理的に支えたのは、マニラとアカプルコとの間に開かれたマニラ・ガレオン貿易であった。その結果、中国・福建より、毎年の季節風に乗って、多数の中国帆船がマニラに定期的に来航し、アカプルコへの輸出品として大量の生糸、絹織物、陶磁器などをもたらすようになった。それに付随して来島する中国人も、その当時の東アジア世界とヨーロッパ世界における金銀交換比率の差を背景にして急速に増大した。すなわち、17世紀初頭には、貿易シーズン中にマニラに滞在する中国人の数は2万人に上り、スペイン人植民者の数をはるかに凌駕した。

これらの中国人のなかには、マニラやその周辺に定住して、スペイン植民者の都市生活や現地の人びとの生活を支える日常物資や各種のサービスを提供する小売商人や職人も多数存在した。これらの中国人移民に対しても、スペイン植民地支配の正統性原理という観点から、カトリシズムの布教が図られ、主としてドミニコ会がその任に当たった。ドミニコ会は、中国人改宗者の居住区として指定されたピノンド地区を拠点に、中国人の改宗と司牧に努めた。しかしながら、その当時、フィリピン総督府にとって、1) これらの中国人は、植民者の生活を支える経済活動に従事していたこと、2) 関税や居住許可税収入をもたらす財源でもあったため、事実上、中国人に対してカトリシズム受容を強制できなかったこと、さらに、当時の中国人は、改宗せずともスペイン領フィリピンにおける経済活動に特段の支障がなかったことの上に、3) 基本的に出稼ぎ的性格をもち、故郷と往復していたが、中国では、カトリシズム（天主教）が原則として禁教であり、さらに清朝の下では断髪の要請には応えられなかったこと、4) 祖先祭祀・「迎福攘災」を核とする多神教的信仰体系をもっていたことなどのため、全体としてみれば、中国人移民に対するカトリシズムの布教は必ずしも成功したとは言えなかった（菅谷2000年、438-443頁）。

その一方、これらの中国人移民の子孫がフィリピンのカトリシズムの発展に貢献したことも事実である。たとえば、1987年に列聖されたフィリピン人最初のカトリック聖人、ロレンソ・ルイスは、1637年にキリシタン禁教下の長崎、西坂刑場で処刑された日本殉教者の一人であるが、マニラのピノンド地区において、中国人の父親と現地のタガログ人の母親との間に生まれた中国系メスティーソであった（Villaruel 1988）。また、フィリピンで創設された女子修道会「聖母マリア修道会 [Congregation of the Religious of the Virgin Mary, RVM]」の前身、「イエズス会女子信心会（ベアテリオ；Beaterio de la Compañía de Jesús, 1684年設立）」を組織したのは、やはり、中国系メスティーソのイグナシア・デル・エスピトゥ・サント（1663-1748年）であった。敬虔なカトリック信徒であったイグナシアは、当時の修道会が一般の諸島住民を正式な会員として受け入れなかったため、イエズス会の修道士の指導をえて、信仰実践の場としてベアテリオを設立したのである（Foronda 1975）。この両者がいずれも中国系メスティーソであったことは、

フィリピンにおけるカトリック信仰の発展と中国人およびその混血の子孫とのかかわりを象徴的に示していると言えよう。

さらに、各地の中国系メスティーソは、18世紀中葉以降、地域間の商業流通を担って社会的上昇を果たすようになったが、商品作物経済の進展に従って、土地への投資を行って一層の富裕化を遂げた者も少なくなかった (Wickberg 1964)。彼らは、一般に、カトリシズムに裏打ちされたスペイン的な教養を身につけ、植民地社会のエリートを構成するようになった。なかんずく、マニラまたは本国で高等教育を受けたメスティーソのなかから、カトリシズムを基底にした植民地社会の民族意識を担い、19世紀末葉のフィリピン革命を導き、さらに現代のフィリピン社会のエリートに連なる人びとが輩出された (池端1987年)。

### 3. フィリピン国民国家の形成とカトリシズム

#### (1) パシヨンの詠唱

フィリピンのカトリック信徒にとって、キリストの受難を追想し、その意味を想起し、追体験する四句節、なかでも聖週間、すなわち、その期間に行われる儀礼は、最も重要な年中行事となっている。たとえば、聖週間のミサや聖像行列への参加者は、年間を通じて最も多いとされる (寺田1991年、74-78頁)。この期間には、十字架の道行きを示し、受難のキリスト像、磔刑像、悲しみの聖母像などから構成される聖像行列が行われ、また鞭打ち苦行などして血を流す者も見られる。17世紀にサマル・レイテ地方の布教・司牧に携わったイエズス会のアルシーナによれば、その当時、聖像行列に際して、すでに人びとの間で鞭打ち苦行などが盛んとなっており、これらの苦行を女性が行うことを禁止しなければならなかった (Yepes 1998, libro II, cap. 14)。

そのなかで、フィリピンにおけるカトリシズム実践を特徴づけるのは、四句節や聖週間に行われる「パシヨン」と呼ばれるキリスト受難詩の詠唱 (パバサ) で、これは、フィリピンのカトリック教徒の間にのみに見られる習慣とされる。

パバサに使用されるテキストの基礎となったのが、1703年に出版されたタガログ語による独自の5行詩形式の長編叙事詩の形体のパシヨンであった。人びとは、これを契機として、口承文学の伝統を背景に、パバサを広く実践するようになっていった。このパシヨンは、実は、バタンガス州のプリンシパリーア (有力者層) で、イエズス会との関係の深かったガスパール・アキノ・デ・ベレンの出版した「終油の秘跡を執行するための祈禱文と式次第 (スペイン語)」のタガログ語翻訳に附属したものであった (Javellana 1988, p.11)。

その背景には、諸島住民のカトリシズム受容が進展する一方で、彼らの信仰を維持し、司牧する修道司祭を含めて聖職者の不足があった。カトリック教会にとっての重大な関心事は、カトリック信徒が臨終に際して、聖職者による終油の秘跡を受けられない状況が生じて、異教の習俗 (精霊崇拜) に回帰することなく、最後までカトリック信徒として死を迎えさせることであった。そこで、プリンシパリーアを先導として、死に至る人、それを見守る人のために、パシヨンが利用されることになった。すなわち、パシヨンによって、植民地の住民にカトリシズムの教義の中心をなす天国と地獄のビジョンを与え、キリストの受難の意味を理解させ、臨終に際する必要を満たすことが図られたのである (Javellana 1988, pp. 12-13; Rafael 1988, pp. 167-209; 池端1991年、230-234頁)。さらに、現地の言葉によるパシヨンの詠唱は、当時のラテン語による典礼を補完し、なかでも四句節および聖週間における教会典礼の間隙を埋めるにふさわしい行為とされ、特に奨励された (Javellana 1988, p. 29)。

## (2) 「カトリシズムの逆説的機能」

その後、アキノ・デ・ベレンのパッションを土台として、それを大幅に拡充させたピラピル版と通称されるタガログ語のパッションが1814年に刊行された。これは「創世記のパッション」とも呼ばれるが、その作者は不明である。その構成は、キリストの受難を核としつつも、人びとのマリア崇敬を反映して、マリアに関する叙述が全体の3分の1近くを占め、かつ創世記の世界から黙示録の世界を描いた長大な叙事詩になっている。これが現在流布しているパッションの原型で、各地方語への翻訳にともなってパッションの詠唱は、タガログ語地域を越えてフィリピン諸島各地に広まった (Javellana 1988, pp. 13-19)。

これらのパッションが創造されたことは、18世紀以降、植民地の人びとがカトリシズムを自身のものとして主体的に受容し、それを自身で解釈するようになったことを示している。さらに、そこで示された世界観がパバサを通じてスペイン領フィリピン各地に広まり、浸透し、定着していったのである。それによって、スペイン領フィリピンの住民は、言語別の地域を越えて、いわゆる「パッションによる了解構造」を共有するようになったと考えられている。すなわち、ピラピル版のパッションは、人びとに、キリスト受難の意味を、創世記の世界から黙示録の世界に至る統一的な意味世界に位置づけて示したのである。

その結果、人びとは、あるべきカトリシズムの世界という観点から、現実のスペイン植民地支配の矛盾や限界を認識し、それに抵抗する論理をもてるようになった。カトリシズムは、当初、スペイン植民地支配の正統性原理として導入され、住民を支配する道具としても機能していた。しかし、植民地の人びとが、カトリシズムを自身のものとすることによって、逆説的に、それをもたらした植民地支配に抵抗する論理を提供した。これが「カトリシズムの逆説的機能」と言われるものである (池端1991年、229-234頁)。

このようなスペイン領フィリピンの住民の意識変革を反映したものが、1841年に「アポリナリオ・デ・ラ・クルスの乱」として、スペイン植民地政府に殲滅された事件である。これは、多数の犠牲者と300名におよぶ処刑者を出したが、この一方の当事者は、貧しい一般の人びとを会員に設立された「聖ヨセフ兄弟会」という宗教組織であった。聖ヨセフ兄弟会は、祈りを専一にして、天国における永遠の魂の救済を目的に活動するなかで、あるべきカトリシズムの世界を追求したため、弾圧を受け、結果的に、スペイン植民地政府および教会との武力衝突に追い込まれたのであった。兄弟会の会員は、最終局面において、祈りを専一にして苦難を克服しようとし、これをハルマゲドンの戦いと解釈して立ち上がった (池端1985年；池端1990年、292-304頁)。また、1896年に始まるフィリピン革命を主導した秘密結社「カティプーナ」の思想、それに共感して革命に参加した人びと、あるいは、その後のさまざまな反乱や民衆信仰には、やはりパッションによる世界の了解構造が底流にあったと指摘されている (Ileto 1979)。

## (3) 中国系メスティーソと「フィリピン人」の生成

その一方、上記の人びとと接点をもちながらも、これとは別に、「スペイン人」に対応する「フィリピン人 (フィリピーノ)」の生成に貢献したのが、19世紀中葉以降、財力を背景に、マニラやスペイン本国で高等教育を受ける機会があった植民地社会のエリート知識層 (イラストラード) であった。その代表とされるホセ・リサールを初めとして、彼らの多くは、中国系メスティーソあるいはその血筋を引いていた。これらの中国系メスティーソについて、先述の「聖ヨセフ兄弟会」は、貧しい人びとを搾取する存在として排除したが、彼らは、ヨーロッパの思想と教養を背景に、次第にスペイン人による「人種差別」を認識するようになっていった。そのため、これらの中国系メスティーソを中核とするイラストラードは、主として、言論活動を通じて、植民地の改革運動に取り組み、人びとの間に民族共同意識を発展させ、さらには1899年の「マロロス共和国」と通称される「国民国家」の樹立にも貢献した (池端1987年；池端1994年)。

中国系メスティーソは、支配者であるスペイン人と「インディオ」と称された土着の諸島住民との間にあっ

て、どちらからも排除される存在であった。そのため、彼らは、スペイン領フィリピン社会を構成する正統な住民として、生地に自覚的に土着する必要があった。その結果、中国系メスティーソは、アイデンティティ模索の過程で、「スペイン人」に対抗して諸島住民を包括する「フィリピン人」を創造したと言える。一方、彼らを繋いだスペイン的教養の基底にあったのは「カトリシズム」であり、カトリックの教会暦に基づく各地の年中行事において主導的な役割を果たしたのも、中国系メスティーソを初めとする植民地社会のエリートあるいはプリンシパリーアであった。

そのなかで、中国系メスティーソが「インディオ」に対抗して、その威信をかけて執り行った祭礼として、マニラのビノンド地区の守護聖人「ロザリオの聖母」の祭礼「ラ・ナバル」が有名であった (de Viana 2001, pp. 40, 72-73; Wickberg 1965, pp. 138-139)。この祭礼は、現在においてもフィリピンにおけるマリア崇敬を代表する祭礼の一つであるが、以下では、中国人移民との関わりが深いバタンガス州タアルの「カイササイの聖母 (Nuestra Señora de Caysasay)」の奇蹟譚を通して、スペイン領フィリピンにおける中国人移民のあり方をみておきたい。

#### 4. カイササイの聖母 —— 中国人移民とカトリック信仰、および「媽祖」

バタンガス州の南シナ海に面するタアルには「カイササイの聖母」があり、30センチ程の小像とはいえ、その靈験により、各地からのカトリック信徒の崇敬を集めている。タアルはまたフィリピンで唯一、中国人商店の存在しない行政町 (ムニシパリティ) として知られているが、その一方、「カイササイの聖母」像は、中国人 (フィリピン華人) の間で「天上聖母 (媽祖)」と考えられ、多数の信者が訪れている。

この聖母を「媽祖」として奉るバタンガスの華人の信仰が顕在化したのは戦後のことであるが、1960年代からはバタンガスを越えてフィリピン各地の華人が参詣するようになった。特に1974年からは、毎年9月頃 (農曆8月初6日) に、ルソン島中北部のラ・ウニオン州の信者 (1978年に「菲律濱隆天宮 (Ma-cho Temple)」が落成) が大挙してタアル大聖堂に祀られている聖母を訪れ、夜間に道教的な伝統に則った礼拝を行っている (Feria 2003b, pp. 58-60)。また、州都のバタンガスには1975年に建設された「媽祖天后宮」があるが、そこに祀られている媽祖は、「カイササイの聖母」のレプリカである<sup>1)</sup>。バタンガスの媽祖廟では、毎年11月末の3日間にわたる媽祖の発見および鎮境紀念の祭日があるが、その最終日には、カトリック司祭を招いて聖母に捧げるミサが執り行われ、さらに、カトリックの様式に則った聖像行列がなされる (Ang 1997, pp. 64-66)。

一方、「カイササイの聖母」には、現在の「媽祖」信仰とは直接に関係なく、17世紀以来、靈験あらたかな聖母として、スペイン人や中国人移民を含めて、多数の人びとの崇敬を集めてきた歴史がある。その聖母の靈験を示す奇蹟譚には中国人が登場し、スペイン植民地社会と中国人移民との歴史的な関わりを表象するものともなっている。

それによると、「カイササイの聖母」は、1603年にタアル町カイササイのパンシピット川で地元の漁師ファン・マニカッドが偶然に網で掬ったもので、豊漁をもたらした。その管理はプリンシパリーア層の女性に託されたが、聖母は姿を消し、1611-19年の間、カイササイ近くの泉のほとりの岩や木の上などで、たびたび複数の村人の前に出現し、眼病などの癒しの靈験があった。そこで、1620年に聖堂が設けられることになり、1639年に完成した (Feria 2003a, pp. 26-34)。

聖母にまつわる奇蹟譚によると、敬虔なカトリック信徒であった中国人石工のインビン (またはハイビン) は、カイササイの聖堂の建設に携わっていたが、1639年に起こった大規模な中国人蜂起に巻き込まれ、12月7日、地元住民によって他の中国人とともに殺害された<sup>2)</sup>。その当時、パンシピット川は多数の殺害された

中国人の血で紅に染まるほどであったが、インピンは、カイササイの聖母の導きによって救われて蘇生し、12月11日にカイササイの泉付近で倒れているところを村人に見つけられた。その後、インピンは、長年にわたって聖母を崇敬し帰依し続けた。ところが、次第に聖母への感謝を忘れ、カトリック信徒としての務めを果たさず、ミサにも告解にも与らなくなり、インピンは、一般の中国人カトリック信徒の無関心な態度よりも、さらに墮落してしまった。インピンはまた聖母よりも妻の方が大切だとも述べた。その結果、インピンは、カイササイの聖母の怒りに触れ、農作業中に犁を引いていた水牛が突然暴れ出して圧殺された (Bencuchilla [o] 1953, pp. 4-10 ; Feria 2003a, p. 34)。

この奇跡譚は、「カイササイの聖母」に捧げるノベナ（9日間の祈りのため祈禱書）に附属して掲載されているが、18世紀になった内容を継承していると思われる<sup>3)</sup>。「カイササイの聖母」の奇跡譚は、スペイン領フィリピンと中国人移民との関係について、その当時までの歴史的経験、およびその当時の植民地社会の状況を反映していると考えられる。中国人移民は、17世紀末葉までには、当時の福建貿易の不振などから、マニラを離れて周辺各地に活路を求めて進出し、各地域において商業活動に従事するなどして、その地の経済に本格的に影響を与えるようになっていた (菅谷2005年、17-19頁)。また、各地域において、中国系メスティーソ人口の蓄積もみられた (Wickberg 1964, pp. 70-71)。

すなわち、この奇跡譚は、インピンが聖堂建設に雇用された石工であったように、中国人移民は、各地域社会での需要に応じて、マニラを離れ、技術をもってその地に進出し、その過程で、カトリシズムに帰依して信仰を实践する者も存在したこと、また、インピンが農作業中に非業の死を遂げたことから、中国人移民が農業を営むなどして次第に地域社会の一員として定着し、その地で家族を形成するようになっていたことを示していると思われる。さらに、これは、教会あるいは聖職者たちが中国人移民のカトリック改宗の意図や信仰の実践のあり方について強い疑念をもっていたことを示している (菅谷2005年、17頁)。すなわち、このような中国人移民が地域社会に存在することが、その地域の一般の住民のカトリック信仰に「悪」影響あるいは「墮落」をもたらし、これら住民が「異教」の習俗に染まるのではないかとの危惧を抱いていたことを反映していると考えられる。

## お わ り に

スペイン領フィリピンにおけるカトリック信仰は、在地の口承文学の伝統や価値観などを取り込みながら、また中国人移民や中国系メスティーソを包摂しつつ、植民地の住民の間に広まったが、それが深化し、内面化される過程で、人びとがカトリシズムを自身で解釈することを可能にし、スペインの植民地支配に抵抗する論理をもたらした。その結果、カトリシズムは、現在のフィリピン国民国家の基底をなし、言語を異にする各地域の人びとを繋ぐ重要な統合原理の一つとなった。

その一方、ムスリムなどを初めとして、カトリック信仰を共有しない住民に疎外感を与え、国家統合の不安定要因ともなっている。そのうち、現代のフィリピン華人は、名目上、カトリック信徒あるいはキリスト教徒が多数を占めるが、その信仰の実態は様々であり、多くは媽祖信仰も含め、祖先祭祀を核とする道教的な多神教的信仰あるいは仏教の儀礼を实践しており、一般のフィリピン人の偏見の対象ともなっている。

しかし、たとえば、上述した「カイササイの聖母」をめぐるのは、2003年12月8-9日に開催された聖母「発見」400年記念の祝祭において、一般のカトリック信徒と華人の媽祖信徒が一堂に会し協働して各種の記念行事・儀礼を執り行い、公に互いの存在および伝統、すなわち、一つの聖母像を二つの宗教／信仰の崇敬の対象として認知しあうなどの新しい動きもみられる (Feria 2003b)。ここに、フィリピンにおける、おそらくスペイン時代からのカトリック信仰のダイナミズムの一端が垣間みられるのではないだろうか。

- 1) この聖母像は、(林1989年、56頁)に写真が掲げられ「菲律濱描東岸省達社天主教堂内奉祀の洋装媽祖像」として紹介されている。なお、「媽祖」は俗称で、正式の神名としては19世紀に広まった「天上聖母」の他に「天后」、「天妃」などがある(朱1996年、6頁、128頁)。
- 2) スペイン領フィリピンでは、17世紀を中心に数次にわたる「中国人蜂起・虐殺事件」が起き、なかでも1603年と1639年の事件は大規模で死者は2万人以上に及んだ。
- 3) 著者のベンクチリョ神父は、アウグスティノ会士で1732年来島し、タアル周辺の教区司祭を務めたが、1776年に没した(Merino 1977, p. 174, n. 51; Feria 2003a, p. 38)。

## 参考文献

- Ang See, Teresita and Go Bon Juan. 1997. "Religious Syncretism among Chinese in the Philippines." In *Chinese in the Philippines*, vol. 1, 65-75. Ed. by Ang See, Teresita. Manila: Kaisa Para Sa Kaunlaran. Bencuchilla[o], Francisco. 1953. *Sketch of the Miraculous Image of Our Lady of Caysasay*. Trans. by Vicente Catapang. Sambat, Taal, Batangas.
- de Viana, Lorelei D. C. 2001. *Three Centuries of Binondo Architecture 1594-1898: A Socio-Historical Perspective*. Manila: University of Santo Tomas Publishing House.
- Feria, Monica and Joey Hisamoto. 2003a "The Lady from Taal." *400 Years of Our Lady of Caysasay: A Commemorative Magazine December 8-9, 2003*, pp. 24-43.
- , 2003b "The Chinese Connection." *Ibid.*, pp. 56-61.
- Foronda, Marcelino A. Jr. 1975. *Mother Ignacia and Her Beaterio*. Makati: St. Paul Publications.
- Galende, Pedro G. 1996. *Angels in Stone: Augustinian Churches in the Philippines*. Manila: San Agustin Museum.
- Ileto, Reynaldo Clemeña. 1979. *Pasyon and Revolution: Popular Movements in the Philippines, 1840-1910*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press [レイナルド・C・イレート『キリスト受難詩と革命——1840-1910年のフィリピン民衆運動』清水展、永野善子監訳、法政大学出版局 2005年].
- Javellana, René B. 1988. *Casaysayan nang Pasiong Mahal ni Jesucristong Panginoon Natin na Sucat Ipag-alab nang Puso nang Sinomang Babasa*. Quezon City: Ateneo de Manila University.
- , 1990. *Mahal na Passion ni Jesu Christong Panginoon Natin na Tola ni Gaspar Aquino de Belen*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.
- Lynch, Frank. 1975. "Fork Catholicism in the Philippines." In *Society, Culture and the Filipino*, Introductory Readings in Sociology and Anthropology, no. 2, pp. 227-238. Ed. by Mary Racelis Hollnsteiner. Quezon City: Institute of Philippine Culture, Ateneo de Manila University; rept. in *Philippine Society and the Individual: Selected Essays of Frank Lynch*, pp. 207-218. Ed. by Aram A. Yengoyan and Perla Q. Makil. Rev. ed., Quezon City: Ateneo de Manila University, 2004. [フランク・リンチ「フィリピンのフォーク・カトリシズム」メアリー・ラセリス・ホルンスタイナー編『フィリピンのこころ』山本まつよ訳、文遊社(めこん)、1977年、131-152頁所収].
- Marasigan, Vicente. 1985. *A Banahaw Guru: Symbolic Deeds of Agapito Illustrisimo*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.
- Mercado, Monina A. 1980. *Antipolo: A Shrine to Our Lady*. Makati, M.M.: Aletheia Foundation.
- Merino, Manuel. 1977. "La Provincia Filipina de Batangas vista por un misionero a fines de siglo XVIII." *Missionalia Hispánica* 34: 139-274.

- Rafael, Vicente T. 1988. *Contracting Colonialism: Translation and Christian Conversion in Tagalog Society under Early Spanish Rule*. Ithaca: Cornell University; Quezon City: Ateneo de Manila University.
- Villaruel, Fidel. 1988. *Lorenzo de Manila: The Protomartyr of the Philippines and His Companions*. 3d ed. Manila: UST Press.
- Wickberg, Edgar. 1964. "The Chinese Mestizo in Philippine History." *Journal of Southeast Asian History* 5 (March): 62-100.
- , 1965 *Chinese in Philippine Life, 1850-1898*. New Haven and London: Yale University Press; rept. ed., Quezon City: Ateneo de Manila University Press, 2001.
- Yepes, Victoria. 1998. *Historia sobrenatural de las islas bisayas: Segunda parte de la Historia de las islas e indios bisayas, del Padre Alzina, Manila: 1668-1670*. Madrid: Consejo Superior de Investigaciones Científicas.
- 足立照也 1991年「異人としてのモリオン」『大阪体育大学紀要』22、131-156頁。
- 池端雪浦 1985年「19世紀フィリピンの民衆カトリシズム — 聖ヨセフ兄弟会の活動を中心として —」『アジア・アフリカ言語文化研究』30、1-77頁。
- 池端雪浦 1987年『フィリピン革命とカトリシズム』勁草書房。
- 池端雪浦 1990年「聖ヨセフ兄弟会とタガログ社会」板垣雄三編『歴史のなかの地域』（シリーズ世界史への問い8）、岩波書店、279-308頁所収。
- 池端雪浦 1991年「フィリピンにおける植民地支配とカトリシズム」石井米雄『東南アジアの歴史』（講座東南アジア学4）弘文堂。
- 池端雪浦 1994年「フィリピン国民国家の原風景 — ホセ・リサールの祖国観と国民観 —」『アジア・アフリカ言語文化研究』46・47合併号、43-78頁。
- 川田牧人 2003年『祈りと祀りの日常知 — フィリピン・ビザヤ地方バンタヤン島民族誌 —』九州大学出版会。
- 菅谷成子 2000年「18世紀中葉フィリピンにおける中国人移民社会のカトリック化と中国系メスティーソの興隆 — 『結婚調査文書』を手がかりとして —」『東洋文化研究所紀要』139、420-444頁。
- 菅谷成子 2005年「18世紀末葉のスペイン領マニラ — 『マニラ公正証書原簿』からみた植民地社会における中国人 —」『愛媛大学法文学部論集』（人文学科編）18、15-32頁。
- 朱天順 1996年『媽祖と中国の民間信仰』平河出版社。
- 寺田勇文 1991年「外来と土着 — フィリピンにおける民衆カトリシズム世界」前田成文編『東南アジアの文化』（講座東南アジア学5）弘文堂、69-92頁所収。
- 寺田勇文 2002年「イグレスア・ニ・クリスト：フィリピン生まれのキリスト教会」寺田勇文編『東南アジアのキリスト教』めこん、55-83頁所収。
- 林祖良 1989年『媽祖』福建教育出版社。